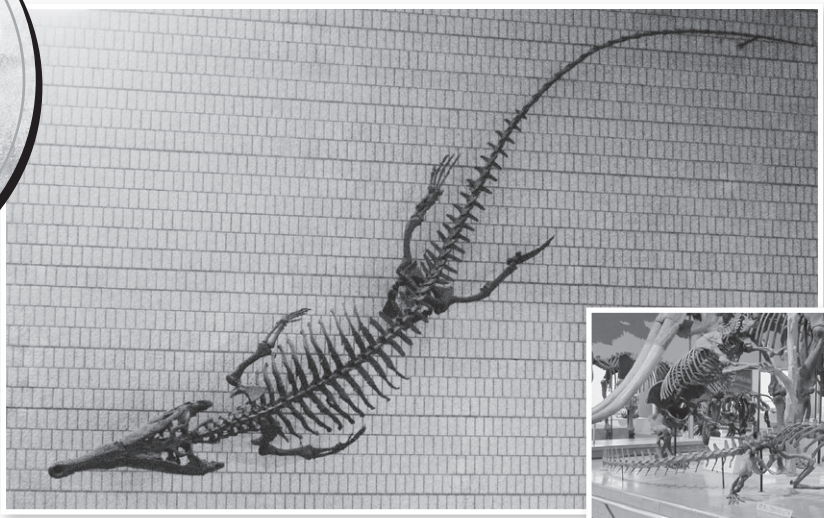
おおさか KEYわーど 第49回

学名は古代神話の女神から

トヨタマヒメイア・マチカネンシス



以前、大阪市立自然史博物館があった元町小学校校舎

大阪市立自然史博物館に展示されているマチカネワニ2体も迫力だ

［写真提供　大阪市立自然史博物館］

時は、50年前の昭和39（1964）年5月3日のこと。世間は秋の東京オリンピック開催準備にあわただしく、大阪でも同年10月に開通する東海道新幹線の工事が佳境に入っていた。豊中の大阪大学理学部校舎の建設現場に化石採集に来た一人の学生が、特徴ある骨片の化石を発見する。付近は北摂の丘陵がニュータウンとして本格的に開発される直前であり、まだまだのんびりした田園風景が広がっていただろう。

謎の化石の正体を知るべく、その学生は化石に詳しい友人と、当時、大阪市西区靭2丁目の小学校を改造した建物で開館していた大阪市立自然史博物館（現在は住吉区長居公園）に持ち込み、鑑定を依頼した。当初はゾウの化石の可能性が高いとされていたが、発掘調査の過程で、なんとそれが、日本ではまだ見つかっていなかった巨大なワニ類の全身骨格化石第一号であることが判明した。「マチカネワニ」の発見である。

発掘調査により、尻尾の先端などが欠けているが、1メートルを越える頭骨をはじめ、脊椎や手足など、ほぼ全身を推測するに足る化石が発見される。体長は6.9~7.7m、体重1.3tと想定され、生息していたのは約45万年前である。ワニは熱帯の生き物のように考えがちだが、「マチカネワニ」は温帯に生息するワニであり、後の研究から現在は「トヨタマヒメイア・マチカネンシス（Toyotamaphimeia machikanensis）」と命名された。「古事記」に登場する鰐の化身とされる豊玉姫に由来する名前である。

実はこの化石は、私が館長をしている大阪大学総合学術博物館（豊中市待兼山町1-20）に常設展示されている。大学所蔵の学術標本として貴重であり、ガラスケースに横たえられた巨体の迫力と時空を超越した姿は、“至宝”とも言いたくなるすばらしさである。発掘後に型を取って制作された複製も十数体ほどあり、ゆかりの深い大阪市立自然史博物館には通常の複製と遊泳している姿の複製あわせて二体が展示されている。

ワニの化石は中国でも見つかり、青木良輔氏は『ワニと龍―恐竜になれなかった動物の話』（平凡社新書）で、龍は単なる空想の産物ではなく古代中国人がマチカネワニの痕跡を見て龍を生み出したのではないかとも推測されている。また、恐竜など古代生物研究の第一人者として知られ、マチカネワニ化石骨格の完全記載論文を共同執筆された北海道大学総合博物館の小林快次准教授によると、恐竜と比べてワニは見た目は地味だが、生存に適した形に進化を突き詰め、どんな環境でも耐えて生き延びることが出来る完成度の高い生物だという。自動車にたとえれば、生きるのに“燃費”のいい生物だというのは、まさに目から鱗だ。

発見50周年の年、マチカネワニ化石は、文化審議会において「ワニ類の進化を示す世界的にも重要な化石」と評価され、国の登録記念物として登録するよう認められた。夏には阪大博物館で「奇跡の古代鰐・マチカネワニ－発見50年の軌跡－」（7月26日～8月30日）を開催するほか、秋は大阪大学シンポジウム「マチカネワニ・サミット2014」（11月16日）なども予定している。

将来、化石をスキャンしてデータ化すれば、3Dによる精密な複製も作成できるし、画像を動かすことも可能だが、いつ見ても阪大博物館にあるオリジナルの化石は、本物だけがもつオーラを放っている。1994年には、60万年前のキシワダワニの化石（きしわだ自然資料館蔵）も発見されており、こんな巨大な生物が、現代の中之島や道頓堀を悠々と泳いでいる情景を想像するのも面白い。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。